

一 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。なお、字数制限のある問いは、すべて句読点や記号も字数にふくめます。

子供たちが集まって劇をするということは、^①楽しい遊びであると同時に、^②おたがいの勉強であるということを忘れないようにしたい。

楽しい遊びであるからには、思う存分、自分が面白^{おもしろ}いと思うように、そして、人も面白がるようにやるのがいい。自分だけが面白く、人にはそれほど面白くないというようなやり方、あるいは、人を面白がらせようとばかりあせって、自分はそのためにかたくなったり、したくないことをしたりするのは、たいへんまちがったやりかたである。

劇というものは、がんらい、見せる方と、見る方とがいに力をあわせ、気もちをそろえて、そこにできあがる美しい全体の空気を楽しむものなのである。

見せる方だけがいっしょうけんめいになり、見る方はそれをただ、じょうずだとか、へただとかいって、見ているのは、ほんとうに、子供たちの楽しい劇とはいえない。それは、いろんなよくない結果を生むはじまりである。

劇がおたがいの勉強になるという意味は、劇にしくまれた「物語」の内容が、なにかしら新しいことを教えるばかりではない。第一に、劇というものは「話し言葉」のもっとも生き生きとした使い方、人間の表情のもっとも正しいあらわし方によって、ひとつの面白い場面が作りあげられるのだから、劇をほんとうに面白いものにするためには、どうしてもみんなが、「話し言葉」の美しさと、表情のけだかさとを身につけ、それを正しく読みとる訓練をしなければならぬ。

美しい「話し言葉」や表情は、役者や俳優を職業とする人たちにかぎらず、すべての人間に必要なことであって、それはちやうど、自然の美しい風景をながめるときと同じように人の心をひきつけ、印象つけて、こころよい感じをあたえる。

昔から、「話をしてみるとどんな人間かわかる」といわれているように、「話し言葉」や表情によって、その話そうとすることがら以外に、その人の年齢^{ねんれい}、男と女の区別、性格、教養の高い低い、職業、またはどこの国かとか、なんの時代か

まではつきりとあらわれるものである。

これだけでも「話し言葉」がどんなに大切かよくわかると思うが、「話し言葉」の美しさをいつも心がけているということは、つまり国語を大切にすることであり、劇をすることによって、劇を見せる方も見る方もこの訓練が自然にできるはずだから、君たちの熱意は、やがて、最近のみだれた国語の品位や魅力みりよくのかいふくに大きな役割をはたすことになるのである。

それと、もうひとつ。劇がおたがいの勉強になるわけは、はじめにいった通り見せる方と見る方とが、力をあわせ、気持ちをそろえることが大事なので、そのためには、劇を舞台ぶたいにかける前から、なるべく、いろいろなめんどうな仕事を、みんなで分担をきめて手つだうようにしなければならぬ。ここから、劇という仕事のはじめから終わりまでを、仲間同志が仲間どうしらしく責任をもち、同じ目的にむかって協力する精神と、複雑な仕事をもつとも順序よく、むだを少なく、完全に仕上げる技術とをやしなう機会が得られるのである。これは、めいめいの立場からいえば、やがて社会に立って一人前の働きをするうえに、ひじょうな強みとなり、全体の立場からいうと、そういう訓練のできた人々の集りからは、もつとも進歩した社会が生まれるわけなのである。

劇が子供たちにとって、面白い遊びの一つだということは、だれでも知っている。

それでは、劇のどういふところがそんなに面白いかというところ、これはなかなかむずかしい問題で、子供たち自身には、そんなりくつはわからなくてもいいが、ただ、間違まちがつてはならないことは、「なにかの真似をする」^③ことだけが面白いのではないということである。「もの真似」も面白いには面白いが、それだけならサルでもやるのである。だから、劇の人物がどんな人物でも、ただそれらしい真似をするだけでは、ほんとうに面白いものにはならない。ことに、一番いいことは、劇の真似をすること、どこかで見たことのある劇の真似、あるいは俳優の真似をすることである。

国語 1
国語 1

ある人物に扮ふんするということは、子供が子供なりの空想で、その人物を頭のなかに描えがいたそのままを、思いきって、自分のからだ、顔つき、動作、衣裳いしやう、声、言葉の調子、などで作りあげることである。

そこではじめて、誰だれの真似でもない、また、誰にも真似のできない、一人の人物のすがたが浮かびあがる。それは、脚本きゃくほんのなかに文字で描かれてある人物をもとにしてはいるが、しかし、それはもう、演技者としての君が、君の空想と君の才能と、君の肉体とで、新しい生命をふきこんだ人物である。

その人物は君とともに生き、君とともに見物の前に立っている。その人物が、君の口をかりてしゃべり、君の眼めをかりてよろこびの瞳ひとみをかがやかし、君の手をかりて涙なみだをふくのである。

④この奇蹟きせきのようだが、なんのふしぎもない、手品のようであり、すこしのごまかしもない、舞台の人物の「生きている」すがたこそ、劇の面白さをつくりだすものなのである。

劇は、おおぜいの協力によってできあがるものである。舞台に立って演技をして見せるものはもとより、装置、効果、照明、衣裳などの受け持ちのために舞台の裏で働くもの、一つの劇をしあげるための、費用や時間のやりくりをするもの、劇場全体の秩序ちうじき、火気、通風、清掃せいそうなどのことに気をくばるもの、見物を気持ちよく劇場にみちびき、安心して席につかせ、忘れものや紛失物ふんしつぶつもなく家にかえず一切の世話いっさいをみるもの、劇のすんだあとのいろいろな始末をするもの、など、いずれも、みな、劇の仕事のなかにふくまれているのである。

⑤子供といえども、このことを忘れて劇をするというのは、どこかで大きな間違いをおかしていることである。

劇の楽しさ、面白さは、舞台を中心とし、そのまわりにかもしだされるすべての人の、たがいにおなじ感動をわかちあうよろこびだ、ともいえるのである。

したがって、見物は、舞台に立つ人々とおなじように、あるていど、劇を楽しく、面白くすることができる。

それは、見物が、劇を見る立場にしながら、見せる立場の人々をよく理解し、これをげきれいしながら、十分に気をつくし、^{ちが}勞をねぎらいながら、つねによき見物であるようにつとめるならば、おのずから、舞台は活気をおび、俗に油がの^⑥るといふ結果になるのである。そして、見物席の、しんけんでなごやかな空気は、それだけでも、見物のめいめいを愉快^{ゆかい}なすがすがしいきもちにさせる。

劇場は、まことに、社会の「ひながた」である。文明社会は、よい劇、すなわち、すぐれた舞台と、心がけのいい見物とをかねそなえた劇場をもっているものだといえよう。

子供の劇場は、かれらが、将来どういふ社会を作るかを予言しているのである。

君たちのすきな劇は、^⑦これからの社会をもつとよい社会にする劇であつてほしい。

(岸田國士「劇の好きな子供たちへ」による。問題作成にあたり、一部表記をあらためた。)

(4)

問1 — 線部①「楽しい遊びである」とありますが、「楽しい」ための条件を説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人を面白がらせることに集中し、自分が多少いやだと思うことも演じきること。
- イ 他人から見ればそうでもない演技でも、自分自身が納得して存分に演じること。
- ウ 演技の上手や下手といった評価に動じることなく、懸命に演じようとする事。
- エ 自身が面白がることと同時に、他人もまた面白がつてくれるように演じること。
- オ 見る側と見せる側が互いに競争し、遊び以上の学びを求めて相互に演じること。

国語1

国語1

問2 — 線部②「おたがいの勉強である」とありますが、これはどういうことですか。その内容を説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 演じる側も見ると、人間が美しいと感じる表情や言葉を習得し雄大な自然の持つ美につなげ、面倒な仕事も自ら取り組むということ。
- イ 演じる側も見ると、物語から現代へ向けて新たな視点を得て社会を批判的にとらえ、目的を共有し順序よく物事を進めるといふこと。
- ウ 演じる側も見ると、限られた言葉や表情などからどのような人物なのかを正しく読み取り、力を合わせて思いを一つにするということ。
- エ 演じる側も見ると、劇中での会話や動作を含めた表現の工夫を身につけ人間として成長し、仕事を分かち合い成し遂げるといふこと。
- オ 演じる側も見ると、受け継がれてきた伝統的な話法を理解し現代の乱れた言葉を修正し、むだなく協力し仕事を上げるといふこと。

(5)

問3 — 線部③「なにかの真似をする」とありますが、このことに対する筆者の考えを説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 他人の真似をすることは面白い要素もないわけではないが、子供の思い描く人物像を自分の持てる様々な力を用いて表現し、演者独自の新たな生きた人物がその演技とともに浮かび上がるところに劇の面白さがある

ので、真似はすべきではない。

イ 他人の演技を真似することには何の価値もなく、真似だけならばサルでも出来ることで、むしろ自分の力を発揮して脚本に忠実に登場人物を再現することで劇の面白さは生まれ出るものだから、人の真似をすることは避けるべきである。

ウ 舞台の上で演じる人物を生きたものとして輝かせるには、その人物がいかなる人間であるかを十分に把握することから始めるべきであるが、役になりきるためにはどうしても他人の真似や、俳優や劇の真似をすることも時には必要である。

エ 劇で演じる人物を自分の中に取り込んでともに生きていく存在として受け入れることで、劇の面白さが増していくので、自分の身体の全てを介して思い描いた空想の人物を自分なりに解釈する必要があり、そのための真似はある程度認めざるをえない。

オ もの真似には面白さがありその全てを否定するわけではないが、劇や俳優の真似をしてしまうと自分の中にあった登場人物の空想が途絶えてしまい、子供がその人物の考え方やしぐさをかりることが出来なくなるため、真似は極力しないほうがよいのだ。

(6)

問4

——線部④「この奇蹟のようだが、なんのふしぎもない、手品のようである、すこしのごまかしもない」とありますが、この部分の表現について説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「ふしぎもない」、「ごまかしもない」という強い否定表現を用いることで、観客にとっては「奇蹟」で「手品」のように見えても、演者にとってはむしろ誰でもできることだというギャップを、感覚的に読者に伝える。

国語1
国語1

ている。

イ 「奇蹟」と「ふしぎもない」、「手品」と「ごまかしもない」という対立する言葉を重ねることで、演者を通じて登場人物が「生きる」ことは「奇蹟」のようだが、自分なりの発想で作り上げれば可能であることを、読者に強調している。

ウ 「奇蹟のよう」、「手品のよう」というたとえの表現とそれを否定する対立的表現を合わせることで、劇を面白い遊びにする難しさを示しながら、演者と観客の距離を縮めていくことの重要性を、読者にわかりやすく示している。

エ 「奇蹟のよう」であるが「ふしぎもない」、「手品のよう」であるが「ごまかしもない」と対比表現を並べることで、演者と観客の対立する考え方を明らかにし、面白い劇にするための方法を、読者に考えるよう、うながしている。

(7)

オ 「奇蹟」と「手品」、「ふしぎもない」と「ごまかしもない」という対応する表現を繰り返すことで、演者と見る者の思い描く物語上の登場人物が重なり、おたがいが劇の面白さを作るという側面を、読者にほのめかしている。

問5

——線部⑤「このこと」の内容を表す一文を本文中から抜き出して答えなさい。

問6 線部⑥「油がのる」とありますが、この言葉の本文中における意味を説明したものととして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 舞台上に年季が入り、楽しいものになる。
- イ 演者が我を忘れて、その人物になりきる。
- ウ 場面がどんどん変わり、次々と感動が生まれる。
- エ 観客が愉快になり、なごやかな空気が生まれる。
- オ 劇に調子が出てきて、面白いものになる。

問7 線部⑦「これからの社会をもっといい社会にする劇」とありますが、「劇」がなぜ「社会」をよくすることができると筆者は考えているのですか。次の空欄A・Bに当てはまるように、それぞれ二〇字以内で説明しなさい。

劇を通じて、演じる側が A ことと、見る側が B ことが、ともに進歩した社会につながると考えるから。

(8)

国語1

国語1

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。なお、字数制限のある問いは、すべて句読点や記号も字数にふくめます。

便利になったものだとおもう。一〇年前(二〇〇二)に自分がインターネットを使うことなど想像すら出来なかった。二〇年前(一九九二)には携帯電話はなかった。三〇年前(一九八二)にコンビニがあったらうか。四〇年(一九七二)前には家に車はなかった。五〇年前の風呂は薪で焚いていた。こう振り返ってみると恐ろしいほどの変化である。さて、この便利さへ向かって進む世の中の歯車を逆回しに出来るだろうか。出来ないだろう、と思う。出来るだけ楽をしたい、快樂を味わいたいというのが人間の本性なのであろうから。この本性が文明をここまで推し進めて来たのだとも言える。この先どこまで便利になるのか、楽しみでもあり、恐ろしくもある。

便利になったものにも偏りがありそうである。どこが便利になったのか簡単におさらいしてみる。

まず、生活の基本である衣、食、住から検討してみよう。

衣の分野では大きな変化はなさそうである。
食の分野では特定の人間に対して多大な便利さをもたらしたものがあある。そのヒットウがコンビニで、特定の人間とは一人暮らしの男や老人、ホームレスである。彼らはコンビニのお陰でなんとかやっていけるのだ。そのかわりに昔の御用聞きが来て、家庭へ配達するというシステムは例外的になった。重い米も酒も自分で買って運ばなければならぬ。家庭にいる老人にはかえって不便になった。これはロウキョウに入りつつある小宅の実感でもある。

住の分野は大層便利になった。冷蔵庫、洗濯機、テレビ、オーブン、エアコンなどなど。その便利さを実感しているのは主婦だろう。スイッチ一つで何もかもすむ。重労働からの解放、冷たい水仕事からの解放。他ならぬ、小生も帰宅しやすく熱いシャワーをアびられる幸せ、この便利さにはカンシャゼざるを得ない。だが、この便利さには脆弱性がひ

(9)

そんでいて、それを思い知らされたのが他ならぬ今回の東日本大震災であった事は周知の事実であろう。電気が来なければ、現代の便利さは一瞬の内に消え去ってしまうのである。

衣、食、住以上に便利になったのが交通であり、情報・通信の分野である。

今も伸びつつある新幹線とコウクウネットワークにより旅行はカクダンにスピードアップした。余程の僻地でない限り、日本の各地へは日帰りが可能である（もつともそれは東京の話だが）。また、切符の購入や座席の予約も便利になった。駅の券売機ですぐに、あるいはインターネットでも出来るのである。少し年長の人なら憶えておられるであろう、炎天下に、またカンプウのなかで駅の窓口で延々と並んだ時の辛さを。また、携帯電話、インターネットのお陰でいつでも知人と連絡を取ることが出来る。出張先からも海外からさえもである。切符を取るために使った膨大な時間がセツヤク出来、連絡が取れるか否かにイライラした不安は解消された。これは有難い便利さで、万人の認める所であろう。

ここで、さてと一服して冷静になって考えると待てよとも思う。現代の便利さは各人に平等なのであるか。そして、その便利さは本当に利用者にとっての便利さなのだろうか。一つの例をとって考えてみよう。駅の券売機の前で困惑顔の老人を見かけることがよくある。券売機の上の路線図にお目当ての駅名が見つからないのだ。乗り換えともなると、表示は実に込み入っていて小生でも容易に見つける事ができない。便利な券売機以前の駅ではどうであったかという、窓口で駅員にどこで大人一枚と言えは事が足りたのであった。これは上京したての女房の笑い噺なのだが、「ひぐれざと一枚」と言つて駅員に「え、どこへ」と聞き返されたという話である。日暮里を「につぼり」とは読めないでしょうと言う。券売機は一寸変な言い方になるが、老人、目の不自由な人、東京の地理に不案内な人には甚だ不便利な便利さである。便利さは弱者にしわ寄せされているのである。ここまで考えてくると、券売機の便利さを最も享受しているのは駅員ではなからうかと思えてくる。切符を売る手間が省け、これに自動改札が加われば、切符を切る手間も省けると言

国語 1

国語 1

うわけだ。いやいや駅員とてもそう楽そうにはみえない。便利さを売り物にして、その便利さで最も得をしているのは実は鉄道会社ではないのか。そう思うのは天邪鬼にすぎるだろうか。次に、スピードアップした交通網の便利さについて。例えば一泊しなければならなかった出張が日帰りになる。一日、少なくとも半日は浮くわけだから、それがどうなったかである。当事者は、その時間を自己の趣味や教養に充てる事が出来れば、便利さの成果を享受した事になる。ところが、そうはならなかった事はサラリーマン諸君なら周知の事実であろう。その時間分また別の仕事をやらねばならなくなったのである。便利さを享受したのは、仕事をする労働者ではなく、会社であったのは明白である。

いつでも連絡のとれる便利さは、現実には以下のような結果をもたらした。職場での、言わば日常圏を脱して束の間自由な空気をコキユウしている所にも、容赦なく職場が割り込んでくる。駅のホームで、新幹線のデッキでせわしなく電話をしている人物を見るのは日常茶飯事であろう。どこに行っても職場から脱出できない。会社によっては家庭にいても職場から脱出できないのだ。サラリーマンの首には紐が巻かれていて、あたかも飼犬のごとくに主人にコントロールされているのだ。ここでもサラリーマン、つまり弱者に便利さはしわ寄せされているのである。極論すれば便利さは強者のための便利さであり、弱者はその恩恵には与れず、むしろ前よりも不便な境涯に貶められているのだという事もできる。

新幹線が出来て風景が悪くなった、あるいは港湾建設のために海や湿地が埋められて風景が失われた、などという事は大事な事ではあるが、きわめて直接的で当たり前の事柄に属するのでここでは触れない。かつて国交省が標榜した日本全国一日日帰り圏が現実のものとなつてどうなったかを考えてみよう。出張先で泊まるはずだった地方都市は旅館、ホテルの稼働率が落ち、地元で落ちるはずのお金も落ちなくなった。またこれは別の話だが、便利さを求めて立地をキョウウした郊外大規模店のお陰で、中心市街地はシャッター街となり果てた。その結果バスの本数も削減される。便利さは

弱者である地方都市へ、老人へしわ寄せされているのである。その現れとして現在の無惨な風景が我々の眼前にあるのだらう。人と人の間に展開する関係も失われつつある。「何々一枚」※「ハイライトひとつ」「オレンジジュース一本」と言う会話、つまりヒューマンコンタクトは各種の自販機じはんきによって失われて久しく、環境かんきやうとともに人間が作りだす情景すらも失われつつある。人間の風景が危機に瀕ひんしているのである。更に言えば、「今日は暖かいですね」といえば煙草屋のおばさんが「本当に暖かくなりましたね」と言う、そういう会話が育はぐんでいた情感の共有の訓練の場も失われつつあるのである。人々はヒューマンコンタクトのチャンネルを失い、ますます孤独こどくになっていかざるをえない。聞く所によると、携帯電話に熱中する子供や若者は決して好きでやっているわけではなく、便利さのお陰で個人がバラバラになりつつあるいま、仲間はずれになる事を恐れて携帯にしがみ付いているのだという。

便利さが進めば進むほど、むしろ社会の脆弱性は増大し、そのしわ寄せが弱者じやくしゃに行く事を述べてきた。現今の便利さは強者きやうしゃにとつての便利さである。しかし強者においてさえも人間関係は希薄きぱく化し、人間を豊かにする情景は失われていくのである。では我々はこれにどう対処すべきか。残念ながら上手い答えは見つからない。冒頭ぼうとうにも述べたように人間は今の便利さを決して手放さず、その本性によつて、より快適な便利さを求め続けるであろうから。弱者の数が強者を上回る時、あるいは脆弱性が社会を崩壊ほうかいに至らしむる時、この資本主義、いや利潤追求主義の便利さ追求は終熄しゆうそくを迎えるのである。内部崩壊や災害に頼たよるとは情けない話であるが、そう考えると、今という時代は従来型人類の便利さ追求を反省するよい機会ではなからうかと考える。

(篠原修「便利さにしわ寄せされるもの」による。問題作成にあたり、一部表記をあらためた。)

注 ※小宅…自分の家をへりくだつてという言葉 ※小生…自分のことをへりくだつてという言葉

※脆弱性…もろくて弱い性質のこと ※標榜…広く世間に伝えること ※ハイライト…たばこの商品名の一つ

問1 〓線部A～Jのカタカナを漢字に書きあらためなさい。

問2 〓線部a・bの語句の、本文中における意味としてもっとも適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

a 天邪鬼

- ア 何にでもひとこと言わないと気のすまない人
- イ 大げさにでたらめを言う人
- ウ わざと逆らつて反対のことを言う人
- エ その時々でつごうのよい方につく人
- オ おべっかを使って気に入られようとする人

b 日常茶飯事

- ア ふつうでありきたりのこと
- イ 昔からならわしとなつてきていること
- ウ 何度も聞いて新鮮味しんせんみのないこと
- エ ほかと比べてかたよつていること
- オ ふつうとちがつて変であること

問3 — 線部①「歯車を逆回しに出来る」とありますが、「歯車を逆回しに」するとはどういうことを言うのですか。十五字以内で説明しなさい。

問4 — 線部②「不便な便利さ」とありますが、これと同様の例として適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア コンビニの登場により、一人暮らしの人や老人らはその便利さを特に享受することになったが、かつての家庭個別配達などは減ってきてしまった。
- イ 多くの電化製品が開発され、特に主婦は重労働などから解放されたが、ひとたび大災害が起こってしまうと全ての便利さが麻痺してしまうことになった。
- ウ 交通網の発達により、移動時間が大幅に短縮されるようになったが、それは東京だけの話で地方の交通網はまだまだ整備が不十分であるところが多くなってしまった。
- エ インターネットの普及により、海外とも一瞬でつながることになったが、いつでも誰とでもつながることがむしろ息苦しさを生むことにもなった。
- オ 郊外の大型店舗出店により、地方であっても多くの物が購入可能となったが、地元の商店街などは廃れ同時にそこにあつた人間同士のつながりもなくなった。

(14)

国語1
国語1

問5 — 線部③「人間の風景が危機に瀕している」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 今まで便利さを追求することと人間の生活の豊かさは無縁であつたにもかかわらず、生活上の人間関係においてさえ便利なことが重視されるようになったこと。
- イ 今まで美しい風景をもつ豊かな自然と人間の生活は共存していたにもかかわらず、開発の名のもとにどんどん自然が破壊されてきているということ。
- ウ 今まで人間が多くの犠牲を払って作り上げてきた伝統的な地域社会が、インターネットなどを通じたグローバル化によって消失してしまうということ。
- エ 今まで周囲の環境に合わせてそれぞれに作り出してきた地方の街やその直接的な人間関係が、便利さだけを追求した技術の発展により崩壊寸前であるということ。
- オ 今まで不便であつたことが逆に豊かな生活を保障していたにもかかわらず、交通網の整備など誰も求めている便利さが強者から無理矢理もたらされたということ。

(15)

